

秋田支部第二三回例会（07・1・13）

「愛国心」概念の転換に向けて

— 明治憲法体制下の教育によって形成された

「愛国心」概念の払拭—

立 花 希 一

リベラルということ、私は何らかの一政党に対する同調者を意味しているのではなく、単に、個人の自由に価値をおき、あらゆる形態の権力や権威に内在する危険性に気づいている人を意味している。

ポバー、『推測と反駁』、序文

問題提起

二〇〇六年十二月、教育基本法が変更され、「我が国と郷土を愛する」という文言が盛り込まれて施行された。法律に記される以前には、「愛国心」などはあまり重要な論点ではなく、個人が自分なりに漠然と感じる（あるいは感じない）だけで問題はなかった。ところが、法律に記載された以上、何らかの強制が生じる懸念がある。戦前に実際に行われたように、政治権力者の考える「愛国心」の押し付けが、通常の公教育を通して行われる可能

性が生まれたのである。そこで、「愛国心」概念を個人が熟慮し、権力に対して抵抗できるような自分なりの見解をもつ必要があるのではないだろうか。

戦前の「愛国心」概念

戦前における政治上の最優先事項は、「国体護持」であった。国体（国の統治形態）に関する議論は、西洋においては、プラトン、アリストテレスに遡る。古代アテネにおいては、ペリクレスの時代に民主制が開花するが、ペリクレスの黄金時代を知らない世代に属するプラトン、アリストテレスは民主主義者ではなかった。近代以前の哲学の世界では、プラトンやアリストテレスの影響のためか、民主制より、王制、哲人政治、貴族制が評価されてきた経緯がある。古代ギリシャの崩壊後、民主制はほぼ死滅し、近代になってようやく復活した。絶対王制を批判し、民主制を導いた先駆者がロックである。ロックは、『統治二論』（一六八九年）の第一篇で、王権神授説に基づく絶対王制を擁護したフィルマーの『家父長制』の議論を逐一反駁し、第二篇で、統治権力のチェックを可能にする、絶対王制に代わる統治形態を提唱した。日本でロックのこの書物が翻訳出版されたのは、戦後（一九四八年）になって初めてであり、さらに、第一篇も含む全訳が出版されたのは、一九九七年である。

戦前には、ロックの政治思想はほとんど看過ないし無視されてきたといっても過言ではない^{（注）}。絶対王制か立憲王制かを区別

するロックの基準が、私見では、まさに民主主義と両立する王制か否かの重要な判定基準になると思われるが、その基準によれば、明治憲法体制下（一八九〇～一九四五年）の天皇制が、民主主義と両立しない前者のそれであることは明白である。にもかかわらず、今日においても、保守派の政治指導者から、戦前の天皇制が後者の立憲王制であった旨の発言がなされる。ラッセルが指摘するように、戦前の「日本では、フィルマー説に酷似する説が提唱され、その説がすべての大学教授や学校の先生によって教えられなければならないかった」のである。^{注2} 因みに、鎌倉時代から江戸時代までの統治形態は、ハーバート・ノーマンの的確な用語によれば、「世襲的軍事独裁制」であった。^{注3}

さて、戦前の「愛国心」の中心概念は、忠君愛国であり、軍人勅諭（一八八二年）と教育勅語（一八九〇年）によって、忠君愛国、忠と孝、滅私奉公等が臣民に徹底的に植え付けられ、学校においてご真影礼拝が強制された。戦前にあつては、もし戦争批判や天皇制批判を公言しようものなら、「国賊」、「売国奴」、「非国民」として抑圧の対象となった。このような抑圧には、不敬罪（一八八〇～一九四七年）の果たす役割が大であった。ラッセルは「一八六八年以後、天皇が天照大神の子孫であり、日本が世界のどこよりも先に創造されたことを日本人は教え込まれた。学問的著作においてすら、この教義に疑問を投げかけた大学教授は、日本人にあるまじき行為（「非国民」として免職させられた」こと）も指摘している。^{注4}

「愛国心」概念の転換

英語では、愛国心に相当する言葉が少なくとも三つあり、nationalism, chauvinism, patriotism である。nationalism とは、「自国（country）が他国より優れているという感情」を意味し、自国優越主義、国家主義と結びつきやすい。chauvinism というのは、ナポレオン一世の熱狂的な崇拜者、ニコラス・ショヴァンに由来し、「自国が他のどの国よりも最も優れているという攻撃的で非合理的信念」を意味し、好戦的愛国主義、軍国主義、帝国主義と結びつく。それに対して、patriotism は、他との比較なしに単純に「国を愛する」の意味であつて、その愛し方は自然的・自発的で、また個々人によって多様な愛し方があり、しかも強制されるものではまったくない。尚、country は国（家）とは限らない。明治に作られた日本の「愛国心」概念は、自国優越主義、国家主義、好戦的愛国主義、軍国主義、帝国主義と結びついていたため、patriotism を翻訳すれば、「愛国心・愛郷心」になるにもかかわらず、今日でも「愛国心・愛郷心」というこの言葉を用いることがきわめて困難な状況にある。

冒頭でも述べたが、「愛国心」概念が法律に記載されなければ、「愛国心」などは重要な問題ではなかった。ところが、新たな教育基本法施行で事態が一変した。「愛国心」概念を各人が熟慮し、権力に対して抵抗できるような自分なりの見解をもつ必要が生まれたのである。

そこで、筆者自身が愛国者 (patriot) とみなす例を挙げることによって、「愛国心」概念の転換を示唆したいと思う。エレミヤ (前七〜六世紀)、ラッセル (一八七二〜一九七〇年)、そしてアーレン・ワタダである^(注6)。

『聖書』に登場するエレミヤは、故国、南王国ユダの人びとが悪に走ったため、神の罰としてユダがバビロニアに滅ぼされるという預言により、王からも民衆からも疎まれ四面楚歌となった人物である。さらに、時の王、ゼデキヤがバビロンに連行されるという最悪の預言を行ったので、ゼデキヤによって逮捕・拘留され、危うく死刑になるところであった (エレミヤと同様の預言をした預言者ウリヤは、ヨヤキム王によって実際に殺害されている)。

また『聖書』の記述では、事後的に「偽の預言者」とされるハナンヤとの対決場面でも、民衆はハナンヤを支持し、エレミヤはその時点では敗北したことが伺える。しかしながら、ユダヤ的伝統では、預言者エレミヤこそが「愛国者」だとみなされている。

先に日本への評言で引用したラッセルは、第一次世界大戦中、徹底的な非戦論を主張して、良心的異議申立者となり、その結果、ケンブリッジの教授職を追われ、投獄された。冒頭に引用したボバーの弟子、アガシは、ラッセルについて、かれは「愛国的な感情をけつして表明しなかったけれども、愛国者 (patriot) であつた」と述べている^(注6)。

最近の事例では、アーレン・ワタダを挙げることができよう。かれは、日系アメリカ人の陸軍中尉で、イラク戦争に反対し、良

心的不服従を貫き、兵役を拒否した人物である。かれは、「違法な戦争に異を唱えるのは、憲法にのっとった米国人の義務で、愛国、忠誠心の発露だ」と記者会見で発言したと伝えられている^(注7)。ワタダが「愛国者」といえるかどうかについて、アメリカでは意見が分かれているが、このような問題がマスコミでも取り上げられ、活発に議論されていること自体が注目に値する。

この三者は、戦前の「愛国心」概念からみれば、「愛国者」の対極にある人物だということになるだろう。しかし、かれらこそ「愛国者」として認めるべきだということになれば、戦前の「愛国心」概念を変更する必要があるのではないだろうか。戦前の忠君愛国という「愛国心」への反発から、これまで知識人の間では「愛国心」概念を全面的に拒絶する傾向がみられたが、そのことがかえって、明治に作られた「愛国心」概念を温存させる結果になってしまったとも考えられる。

「我が国と郷土を愛する」という表現の「愛国心」が教育基本法に盛り込まれてしまった以上、戦前の「愛国心」とはまったく異なる「愛国心」の概念を、日本という政治社会 (political society)^(注8) に属する人びとが議論を通して追求することにより、その概念の明確化を図ることが必要だと思われる。この新たな「愛国心」概念に基づく愛国者とは、「権力を恐れ、それにこびへつらい迎合し、特に掲げたくもないのに日の丸を掲げたり、あまり歌いたくもないのに君が代を歌ったりする人間などではなく、自分の良心に照らして正しいと判断する道を歩む人間、現状維持

の怠惰な心に負けることなく、日本社会の諸問題を把握し勇気をもって改善を試み、さらには、世界をより良き世界にしようとする力する人間のことではなからうか^(注⑥)。

〈参考文献〉

- ロック、『全訳、統治論』（一六八九年）、柏書房、一九九七年（フィ
ルマーの『家父長制』第一章も訳出）。
- Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Routledge,
1993 (first published 1946).
- ハーバート・ノーマン、『日本における近代国家の成立』（『ハーバ
ート・ノーマン全集』第一巻、岩波書店、一九七七年）。
- 「エレンヤ書」、『新共同訳 聖書』日本聖書協会。
- Joseph Agassi, *The notion of the modern nation-state: Popper
and nationalism, Popper's Open Society after Fifty Years*,
Routledge, 1999.

〈注〉

- (1) 田中浩は、「明治啓蒙期の思想家たちは、……自由主義の源泉
となった十七・十八世紀の古典的な人権思想の原理まで遡って
研究していなかった」と喝破している。『近代日本とリベラリ
ズム』、岩波書店、一九九三年、八ページ。
- (2) Russell, p. 598.
- (3) ノーマン、三十三ページ。
- (4) Russell, p. 129.
- (5) 内村鑑三（一八六一―一九三〇年）も取り上げるべきなのだ
が、取り上げると書くことが多くなり、字数制限のため果たせ
なかった。内村鑑三小選集『愛国心をめぐって』が便利である。
また、現代アジアにおける「愛国者」の事例としては、ミャン
マーのアウンサン・スー・チーを挙げることもできるだろう。

(6)

Agassi, p. 191. 上の論文の中では、nationalism, chauvinism,
patriotism の比較検討も行われている。世界平和や普遍的価
値を追求するラッセルのような人物は、自分では「愛国者」を
標榜しないどころか、「愛国心」を批判しているが、そのよ
うな人物こそ、「愛国者」と言えるかもしれない。逆に、「愛国
者」を自称したり、「愛国心」を他者に強要したりする者には
警戒が必要なのだ。

(7)

「秋田さきがけ」、二〇〇六年十二月十四日、木曜日、夕刊、二
面。

(8)

ロックの用語。かれは、政治社会 (political society) と市民
社会 (civil society) を同列に扱って論じている。政治社会の成
員とは、国籍は問わずその社会で生活する人間、市民 (citizen)
である。注9の指摘とも関連する。

(9)

このような「愛国者」には、国籍は問われない。日本に住む朝
鮮系住民、中国系住民等の中にもそのような「愛国者」は少な
からず存在するであろう。但し、私はこのような意味での「愛
国者」とはほど遠いし、その力量もない。

（たちばな・きいち、批判的合理主義・

ヘブライズム、秋田大学教授）